

技術協力活動と研修活動の連携

第6回：今後の展開（最終回）

本シリーズでこれまで取り上げてきた連携タイプの特徴は、以下のようにまとめることが出来る。実際の研修や技術協力の現場においては、それぞれのタイプの特徴を生かしつつ、組み合わせ等の可能性も検討しながら連携を促進していくことになる。ただし、ここで最も大切なことは途上国における農民の生活や生産現場を常に視野の中に置かなければならないという点である。つまり、研修活動によって研修員の技術力を向上させるだけでなく、技術力を身につけた研修員が活躍できる普及現場までを視野に入れた活動を展開することこそが現場では強く求められている。過去に国際耕種が実施した南部アフリカ地域別研修野菜・畑作物栽培技術コースでの経験に基づいて、この辺のところをもう少し掘り下げてみたい。

連携タイプ	特徴
フォローアップ型	研修効果をより確実なものにできると同時に、現場のニーズに即したプロ形に貢献できる。
技プロとの連携型	技プロと研修活動の協調による補完的機能により、双方にとって効果的な活動が可能になる。
第三国研修重視型	研修員は類似環境で研修を受けるため、研修を通して得た知識・技術を自国で応用しやすい。
複合プログラム型	プロ形の段階から様々なスキームを包括的に推進することにより、より効果的な支援が可能となる。

南部アフリカ地域別研修野菜・畑作物栽培技術コースの最終的な目的は食料自給率の改善と貧困抑制であり、とりあえずは小規模農家の野菜・畑作物栽培技術の向上を通じた自立的経営を目指している。つまり、本研修で習得された技術を自国に適應させるためには、技術の改善さらには改善された技術の持続的普及が必要となる。現段階では、こうした改善や普及の実施は各々の帰国研修員の双肩に委ねられている。彼らのアクションプランからその意欲をうかがうことはできるものの、研修員帰国後の現地における活動支援は本研修活動の一環としては実施されていない。また、フォローアップ調査等によって研修を受けた普及員による現場での技術普及の大切さが強調されたとしても、農家を相手にした活動は別案件として立ち上げて行かなければならない。

一方、研修活動に技プロあるいは草の根技協が当初から組み込まれた形で実施されていれば、研修ニーズの把握にしても帰国研修員による技術改善ならびに普及活動にしても、生産現場の実情に応じた形で実施できるはずである。つまり、研修効果と技術協力の効果を総合的に考えるならば、下図（右）に示すように将来的には研修活動と現地での技術協力活動とが有機的な連携のもとに実施されることが理想的な姿であることは明白である。

